

実践研究事業

海からのメッセージ



令和5年3月



独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立大隅青少年自然の家

I 実践研究概要

1 研究のテーマ

生きる力の向上を目的とした青少年教育事業のプログラムに関する検討 ～国立大隅青少年自然の家主催の「海からのメッセージ」事業を対象とした事例研究～

2 実践研究の背景

国立大隅青少年自然の家では2006年より夏休み期間の長期体験事業として「海からのメッセージ」を行っている。「海からのメッセージ」は海の素晴らしさを体験することで、青少年の「生きる力」を育む長期冒険型体験活動であるとともに、心に悩みを持つ青少年の自立を支援することも狙いとしている。

この「生きる力」については、「克服的課題を含んだ活動や4泊5日以上 of 自然体験活動」「生活環境や自然環境が日常より厳しい条件下のキャンプ」が生きる力の向上に有効であることが様々な先行研究で示されている。

本施設で行っている「海からのメッセージ」は上記の条件に合った教育事業に該当する事業である。

この「海からのメッセージ」について、海浜活動（カヌー活動・ゴムボート活動）だけ体験（実施）する年があれば、徒歩による遠行やスポーツクライミング体験、SUP（Stand Up Paddleboard）体験やボディボード体験、磯観察等の海洋体験を取り入れた年もあり、事業担当者によって体験内容を変えながら実施してきた事業である。

また、事業の振り返りや事業実施による参加者の意識変化に係る調査・分析等については「事業の前後を比較する」に留まっており、活動内容と生きる力に関する相関関係や、長期的な視点に立った分析（年度比較）は行ってこなかった。

これまでに実施した「海からのメッセージ」を振り返り、プログラムの内容による、「生きる力」の差異について年度間で比較・検証することは、次年度以降の「海からのメッセージ」をさらに充実した事業にするために大変有意義であると考え、本研究を進めていくことにした。

3 実践研究事業概要

(1) 事業名

「海からのメッセージ」

(2) 対象者

小学5・6年生、中学生、高校生

(3) 事業の目的

鹿児島湾（錦江湾）を舞台に、海の素晴らしさや厳しさを体験することにより、「生きる力」を育む。また、実践研究として体験活動の重要性の普及に努める。

(4) 連携する機関・研究者名

国立大学法人 鹿屋体育大学

海洋スポーツセンター センター長 中村 夏実 教授

副センター長 榮樂 洋光 講師

センター教員 笹子 悠歩 助教

坂口 陽平 専門職員

Ⅱ 令和３年度事業内容

海からのメッセージ

～ 「カヌーと野炊とテントと私」 ～

- 1 趣 旨 鹿児島湾（錦江湾）を舞台に、海の素晴らしさや厳しさを体験することにより、海の良さを知り、「生きる力」を育む。また、長期冒険型活動を通して心に悩みをもつ青少年の自立を支援する。
- 2 期 日 令和３年８月６日（金）～１１日（水） ５泊６日
- 3 参加対象 小学５・６年生、中学生、高校生
- 4 募集定員 ２０人
- 5 参加者 １８人（小学生１１人、中学生７人）
- 6 指導者 外部指導員４人 国立大隅青少年自然の家６人 ボランティア５人

7 日 程 【全行程（約３０km）をカヌーで実施】

日	活 動 内 容	活動(宿泊)場所
８月 ６日（金）	開講式，アイスブレイク，カヌー練習	新城海の家
８月 ７日（土）	新城～荒平天神～浜田海水浴場	新城海の家
８月 ８日（日）	クラフト活動，クライミング	新城海の家 自然の家本館
８月 ９日（月）	ＳＵＰ，海浜観察，ロープワーク等	鹿屋体大海洋ＳＣ 新城海の家
８月１０日（火）	浜田海水浴場～知林ヶ島	新城海の家
８月１１日（水）	片付け，まとめ，閉講式	新城海の家

8 事業の企画・運営

- (1) 昨年度までのコースを一新し、「鹿屋体育大学海洋スポーツセンター」での海洋体験学習は取り入れ、実践研究と兼ね、挑戦・協力・体験の3つを今回のテーマとした。
- (2) ルート設定後、職員の実地踏査や外部指導員と検討を重ね、危険箇所の確認を十分に行った。
- (3) 18人の参加者を6人×3班の編成とした。監視艇及び救助艇3艇での監視、マイクロバス1台での移動を可能にしたことで参加者の安全面に十分配慮した。
- (4) 鹿屋市、垂水市、指宿市や関係機関（海上保安部、喜入海上保安署、指宿海上保安署、漁業協同組合、警察署、消防署）と連携を密にし、活動中の安全対策を万全にした。
- (5) 昨年度にならい、全日程、新城海の家を宿泊場所にすることで野外炊飯を食事のメニューに入れることができた。

9 事業の実際

1日目（6日）に開講式を行った。アイスブレイク後、翌日からの荒天を考慮し、急遽、カヌーの操作や乗り降り、沈、再乗艇、曳航の確認などの練習を取り入れた。その後の野外炊飯に時間がずれ込んだが、カヌーの経験をさせる上でも1日目に練習の時間を入れ、ペアで漕いだり、準備や片付けをさせたりしたのはよかった。野外炊飯もスムーズに行えた。

2日目（7日）は、晴天で海の状態もよく、新城の家から荒平天神そして海洋スポーツセンターまでを計画していたが、次の日の天候を考え浜田海水浴場まで漕ぐ形をとった。残念ながら一人発熱で帰宅することになったが、その他17人は約10kmを漕破することができた。

3日目（8日）は、台風の影響で海に出ることができなかった。朝食後、本館に行き、午前中は革細工、午後からは、遊びリンピックとスポーツクライミングを行った。その間、スタッフでテントを海浜観察室に運び入れ、宿泊場所にした。雨風が激しかったが、何事もなく海の家で過ごすことができた。



4日目（9日）は、朝からまだ少し台風の影響で波が高かった。海洋スポーツセンターに移動し、雨天プログラムを準備していただいた。午前中は、ロープワークやカヌーの説明等、海以外でできる活動を行い、午後は海の状態を見てSUPを行った。計画していたヨットでの活動はできず残念だったが、SUPだけでも海浜活動ができたのはよかった。



5日目（10日）は、天気も回復し、浜田海水浴場から知林ヶ島に挑むことにした。朝食も野外炊飯は行わず弁当で済ませ、できるだけはやく浜田海水浴場から出発することとした。今年度は事業開始時の台風の影響により、蒼天丸でなくトルネードでの救助となったため、トイレがない等の指導を事前に徹底した。当初、台風の影響がほとんどない風の状態でのカヌー漕航だったが、11時頃から風が出てきだし、最後は知林ヶ島を目の前に曳航される形となった。



挑んだ参加者全てが知林ヶ島にたどり着くことができ、ホッとする安堵感と達成感があつた。参加者も自然の雄大さと怖さを垣間見る活動であったと思う。



6日目（11日）は、テントの撤収や荷物整理、カヌーの整備、カヌー艇庫の掃除、これまでの反省等を行った。昨年度は十分にカヌーの片付け等が行えなかったのが、最後にきちんと後片付けまでできたことがよかった。その後、これまでの反省やこれからの目標についてボランティアを中心に班活動を行った。お世話になったボランティアとも最後にいろいろな話ができてよかったようである。

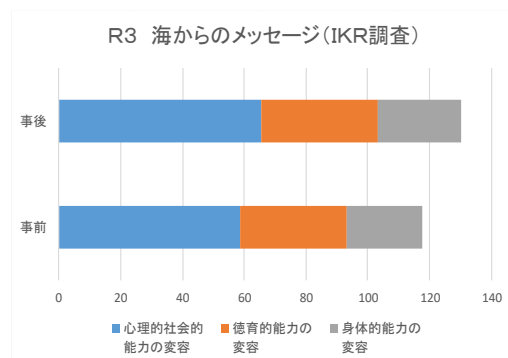


閉講式ではスタッフもそれぞれ話す場を設定し感想を語ってもらった。それぞれの思いも語れてよかったと思う。

10 アンケート結果（参加者 I K Rアンケート）

全体的（生きる力の変容）に見ると、事前から事後にかけて12.6p向上し、有意差が見られた。

項目別に見ると「洗濯機でなくても手で洗濯できる」で1.06p、「その場にふさわしい行動ができる」



で 0.82 p, 「自分で問題点や課題を見つけることができる」で 0.82 p 上昇するなど全ての項目で事前と事後とで意識の向上が見られた。これは, 5泊6日という長期宿泊体験を通して, 友だちと協力し, コミュニケーションを取ることの大切さを学んだこと,

	心理的社会的 能力の変容	徳育的能力の 変容	身体的能力の 変容
事前	58.6	34.6	24.5
事後	65.4	37.8	27.1

普段の生活から離れ, 自分自身を見つめる時間が多くあったこと, 自己の課題を発見し, それに対してどう対応するべきか考えることができたことなどが要因ではないかと思われる。スマホやゲーム, SNSなどに囲まれた生活から, しばらく離れた生活をしたことで人との関わりが増え, 自己肯定感も高まったのではないかと考えられる。

11 参加者・保護者の事業後の感想

(1) 参加者の感想

- ・ カヌーはペアの人と声をかけ合いながら漕ぐことができた。知林ヶ島に渡るのは大変だったけど, 協力してできたので良かったです。
- ・ 初めて長い期間, 家を離れて過ごしました。楽しく6日間を乗りきることができました。自分の自信につながればと思っています。
- ・ とても楽しくて充実していたので, また同じメンバーで集まりたい気持ちでいっぱいです。6日間, ありがとうございました。また何か新しいことに挑戦してみたいです。参加させていただきありがとうございました。

(2) 保護者の感想

- ・ 貴重な経験をさせていただきありがとうございました。カヌーだけでなく, 野外での活動などいろいろな経験をすることができ, 喜んでおります。目を輝かせて出来事を話してくれたことにうれしく思いました。
- ・ 5泊6日という長い期間, 親元を離れて生活するのは初めてでした。両親の不安に反してとても楽しかった様子で本人の自信につながったようです。
- ・ あまり親に頼らず, 「自分のことは自分でやる。」という気持ちが芽生えたように思います。成長してくれたことをうれしく思います。久しぶりに会った時にはたくましく感じました。ありがとうございました。

12 成果と課題 (○成果 ●課題)

- 今年度は, カヌー挑戦に加え錦江湾横断, 鹿屋体育大学海洋スポーツセンターでの体験活動を取り入れた。さまざまな面から海からのメッセージを感じさせるといったプログラムはよかった。
- 体大からの実習生や法人ボランティアの方々の活躍があり, 目的地の知林ヶ島に到達することができた。
- 日程を細かく決めておくと台風や荒天時に予定が立たないので, 1日くらい予備日があってもよいかもと感じた。

Ⅲ 令和４年度事業内容

１ 令和４年度の「海からのメッセージ」について

令和４年度は令和４年８月１１日（木）から令和４年８月１６日（火）の、５泊６日で実施を予定していた。

しかし、新型コロナウイルスの感染者が拡大し、実施の３日前に事業中止を決定した。

２ 令和４年度の実践事業について

上記の通り、令和４年度の「海からのメッセージ」を中止としたため、当初計画していた「令和３年度」と「令和４年度」を比較した実践事業の中間報告作成が困難となった。

そのため、国立大学法人鹿屋体育大学海洋スポーツセンター教授中村夏実氏及び助教笹子悠歩氏の指導のもと、令和４年度は過去６か年の「海からのメッセージ」について、その事業内容や得られた IKR 調査結果の分析を行うことにした。

３ 令和４年度の実践について

（１）目的

大隅くん家の教育事業「海からのメッセージ」を対象として、これまで行ってきた各年度の結果を基に、「生きる力」の向上に有効なプログラムについて、事例的に検討する

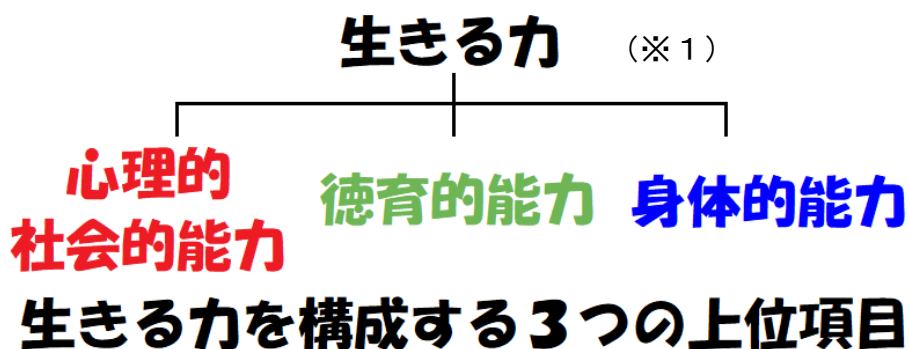
（２）分析対象とした期間および対象者数

大隅青少年自然の家に資料が保管されていた 2015 年から 2021 年を分析対象とした。

「海からのメッセージ」は、小学校５年から高校生を対象としており、2015 年～2021 年までの 7 年間の内、2019 年を除いた 6 年間（2019 年のデータは欠損）計 158 名（対象者の内訳：男性 92 名〈58.2%〉、女性 66 名〈41.8%〉、小学生 93 名〈58.9%〉、中学生 52 名〈32.9%〉、高校生 13 名〈8.2%〉）を分析対象とした。

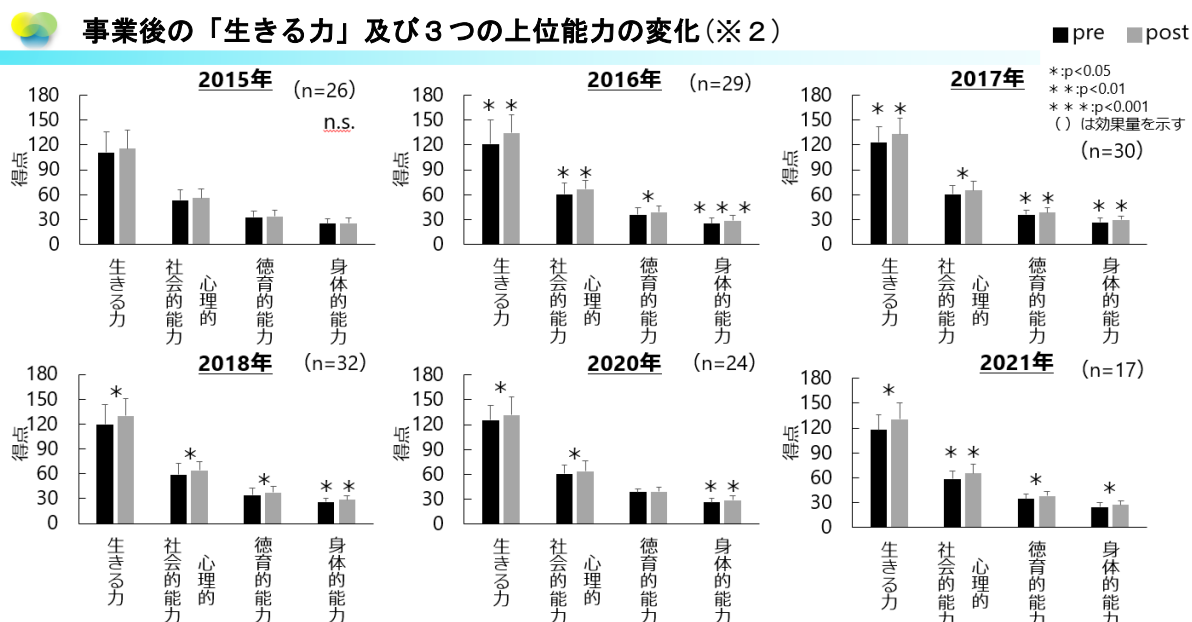
（３）分析項目について

分析項目については、事業の前後に実施した生きる力評価用紙（通称 IKR 調査）で得られた『「生きる力を構成する３つの上位能力と、それらによって得られる「生きる力」』とした（下図※１参照）。



(4) 結果

下図（※2）は、事業前と事業後に実施した IKR の、「生きる力」及び3つの上位能力の変化を、2015、2016、2017、2018、2020、2021 年と、年度別に表したものである。2016・2017・2018・2021 年は全ての能力が事業前後で向上している一方、2015 年は3つの上位能力の向上が見られず、それに基づく「生きる力」の変化も無かった。



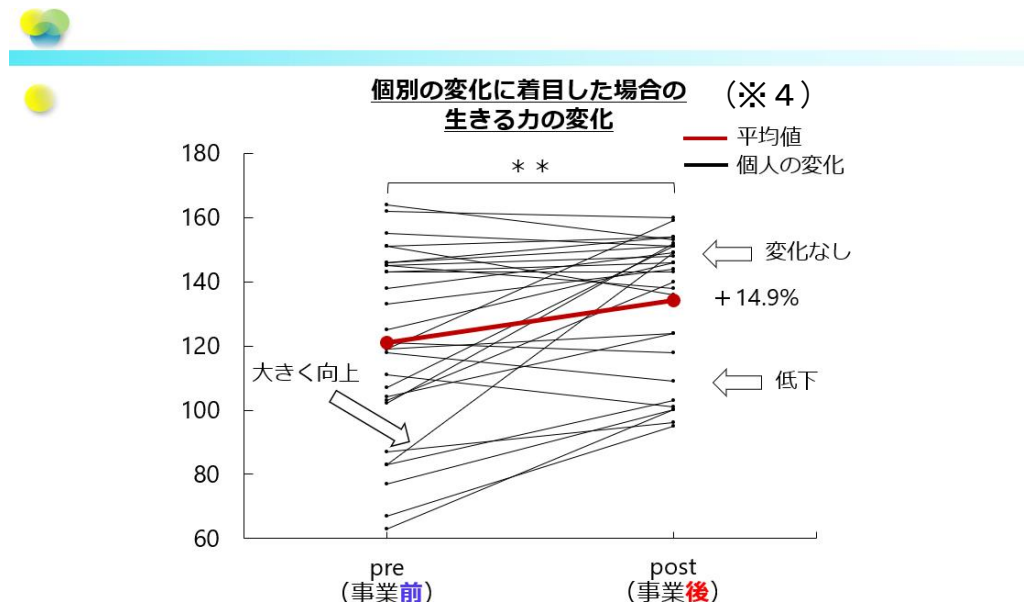
次に、生きる力が顕著に向上した 2016・2017・2021 年と変化が認められなかった 2015 年のプログラムを示したものが下図（※3）である。生きる力が顕著に向上した年のプログラムは、日数が5泊6日以上であり、錦江湾縦断など、具体的な達成目標を掲げていた。また、カヌー以外にも徒歩やクライミングなど、複数の種目をプログラムに取り入れていたというものである。

それに対し、2015 年度は台風の影響で宿泊日数が2泊3日と短く、活動もカヌーのみというプログラムであった。

● 生きる力が顕著に向上した年度と、変化が認められなかった年度のプログラムの比較（※3）

	生きる力が顕著に向上した年度		生きる力が変化が認められなかった年度
	2016年および2017年	2021年	2015年
生きる力の変化（効果量の結果）	中程度	中程度	効果量なし
宿泊形態	移動に伴い様々な場所でテントおよび施設（体育館など）泊	機構の施設にてテント泊	機構の施設にてテント泊
食事形態	お弁当および野外炊飯	お弁当および野外炊飯	お弁当および野外炊飯
日数	6泊7日	5泊6日	2泊3日
目標	錦江湾縦断	錦江湾横断	機構の施設を拠点にカヌーで移動
実施した種目	カヌー、徒歩	カヌー、SUP、クライミング	カヌーのみ

次に一人一人の変化に着目してみた。各能力が顕著に向上していた 2016 年度について検討したものが下のグラフ（※ 4）である。全体としては事業前後で生きる力の数値がプラス 14.9 と向上しているものの、個人的には大きく向上している参加者もいれば逆に低下している参加者、ほとんど変化していない参加者もいた。全体的な傾向として、生きる力に関する事業前の数値が低い参加者は事業後、顕著な向上がみられるが、事業前の数値が高い参加者はあまり変化していないかまたは逆に低下していることが読み取れた。

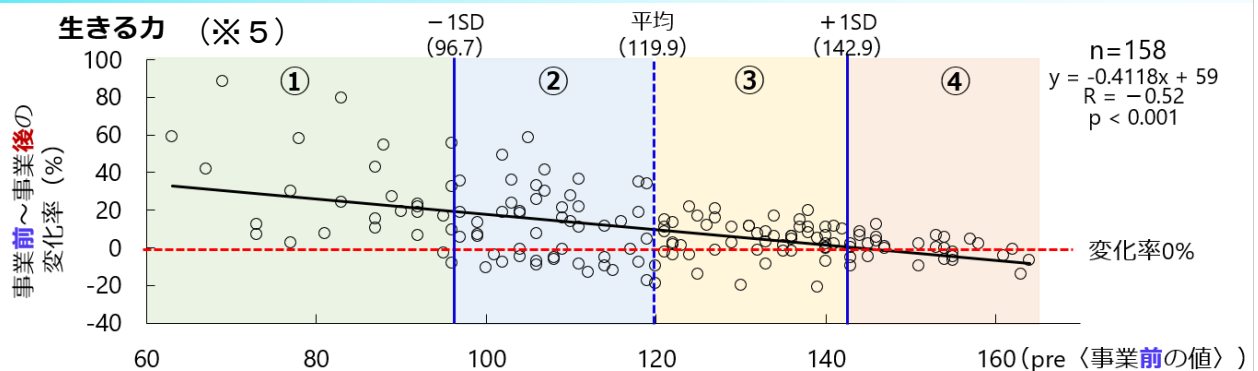


下のグラフ（※ 5）は全参加者 158 名の、横軸に「生きる力に関する事業前の値」、縦軸に「事業前と事業後の変化率」を示したものである。事業前の生きる力の平均値は 119.9 であった。

グラフを見て分かるとおり、事業前の値と事業前後の変化率との間には明らかな負の相関関係がある。また、初期値が低い参加者ほど変化率が大きく、特に -1 SD より低い参加者は変化率の大小はあるものの、全員の生きる力が向上していることがわかる。そして、事業前の生きる力の値が大きくなるにつれ、生きる力が向上する参加者が減っていることが読み取れる。

また、このことは参加者の初期値によって事業の効果に差が出ていることを端的に示している。

【 ± 1 SD は、平均値から 1 SD を引いた値から、平均値に 1SD を足した値までの間に約 70%が存在するというを示し、本研究の場合、IKR96.7 点（平均点～SD を引いた値です）～142.9 点（平均点に SD を足した値）の間に約 70%があったことを示す】



● 生きる力の初期値別見た場合の、海からのメッセージによる生きる力の変化率 (%)

① −1SD未満	② −1SD～平均	③ 平均～+1SD	④ +1SD以上
----------	-----------	-----------	----------

(5) 考察

① 平均値に関する考察

「生きる力」が向上した年度の特徴として、宿泊日数、すなわち体験活動の量が多い、また、錦江湾横断や 110 km 走破（漕破）など具体的な目標が設定されている、カヌー体験だけでなくスポーツクライミングや SUP など複数のプログラムを実施しているなど、プログラムの質が高いことが挙げられる。このことは体験活動に関する先行研究でも指摘されており、事業を企画していくうえで質と量を考慮しなければならないことが改めて認識できた。

② 個別の変化に着目した分析に関する考察

全体として、IKR の得点が低い者は、現在実施しているプログラムでも期待する効果が得られる可能性が大きくなる。ところが、得点の高い方に分類される参加者は、現在実施しているプログラムでは得られる効果が期待以下のものになる可能性が大きくなり、それを防ぐためにプログラムを大きく変更することは難しい。

その為、例えば上陸した休憩を予定より減らしたり、多少コンディションが難しくても陸に近い安全な航路で出港したりするなど、行程的な負荷を少し上げることが必要になることが想定される。

また、得点の高いほうに分類される参加者には班の責任者として役割を与えたり、野外炊飯やテント泊に関する総責任者に抜擢したりするなど、負荷をあげることも有効である。

いずれにしても、事業実施前に参加者の実態を把握するための分析が必要になる。業務改善が叫ばれている昨今、事業前の担当者の仕事量が増えることになるので、分析の仕方については今後の検討課題である。

今回の分析で、やはり事業前に実施した調査は事業前に分析することが事業成功へとつながることが改めて分かった。「個の実態把握」に努めながら教育事業を企画・立案していくことが肝要である。

IV 実践研究の成果と今後の課題

1 成果

「海からのメッセージ」について、生きる力の向上に対してより有効なプログラムにするためには具体的な目標を掲げた上で、5泊以上の事業にすること。そして、カヌーだけではなく様々な体験活動を取り入れていくことが必要であることが肝要であることがわかった。

2 今後の課題

① 荒天時（台風接近）に係る対応

「海からのメッセージ」は海洋冒険型長期宿泊教育事業である。言うまでもなく、気象概況に大きく影響を受ける。例えば台風接近が予想されるときは、事業中止を含め、事業内容や日程の変更等も考えられる。このことに対応するため、企画立案者は日程変更を考慮した事業の企画・立案が必要不可欠であり、大きな負担となってくる。台風接近時でも「海からのメッセージ」いう、名称に負けしない『荒天時プログラム』をいかに設計していくかが今後の課題の1つである。

② 天気概況の影響に係る対応

①に加え、「当日波が高く、海浜活動が実施できない」場面も過去多くあった。この場合も、陸を徒歩で移動したり、室内のプログラムを入れたりするのか、「自然」相手の事業だけに、「荒天時プログラム」も立案しておかなければならない。この場合の「荒天時プログラム」についても、『生きる力』を育むために、質の高いプログラムを考えていかなければならない。このことも担当者の大きな負担となっているので、荒天時のプログラムをパターン化していくことが2つ目の課題である。

V まとめ

今回、令和3年度、4年度と、2カ年にわたって本施設の看板事業である「海からのメッセージ」について実践研究を実施した。新型コロナウイルス感染拡大の時期と重なり、担当者は「実施可能か」日々感染状況を確認しながらの事業であった。毎年、定員の10倍近い申し込みのある人気事業であるため、担当者としても何とか実施したいと想いを込めながらの企画・立案であった。

残念ながら令和4年度は実施できなかったが、その期間を活用し、過去の「海からのメッセージ」を振り返り、今後の本事業の方向性を探ることができた。

本実践記録は、国立大学法人鹿屋体育大学海洋スポーツセンター教授中村夏実氏及び助教笹子悠歩氏が進めた研究について、国立大隅青少年自然の家で簡易的にまとめたものである。特に、令和4年度実践研究分の詳細については本施設のホームページにおいて、夏以降に掲載予定であるのでその際は参考にいただくと幸いである。

豊かな人間性を育む長期宿泊型体験事業を推進していくためには、担当職員だけでなく、協力いただく多くの方に意見をお聞きしながら企画・立案していくことが肝要である。現在まで国立大学法人鹿屋体育大学をはじめ各漁協や海上保安庁、各船舶会社等、多くの協力を頂いた。この場をお借りして、本事業にご協力いただいた多くの方々に厚くお礼を申

し上げたい。誠にありがとうございました。

※1～※5： 国立大学法人鹿屋体育大学海洋スポーツセンター助教 笹子悠歩氏が筆頭者として、本報告の内容を第11回日本海洋人間学会大会（2022年9月）に於いて発表した際に用いたスライドの一部となります。

本文の一部について： 笹子悠歩ら、『生きる力の向上を目的とした青少年教育事業のプログラムに関する検討—国立大隅青少年自然の家主催の「海からのメッセージ」事業を対象とした事例研究—』海洋人間学雑誌、投稿中、2023.』記載内容を元にして、国立大隅青少年自然の家で簡易的にまとめたものであります。



独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立大隅青少年自然の家

〒891-2396

鹿児島県鹿屋市花里町赤崩

TEL：0994-46-2222

FAX：0994-46-2540

URL：<https://osumi.niye.go.jp/>